

## 別府の「俳壇」今昔

甲斐 梶 朗

## 一 別府市に於ける俳壇の流れ

別府市の俳句の歴史の流れは、江戸時代より俳人によって育まれ、また温泉地という土地柄、有名人の来遊も多く、この流れは現代にも引き継がれている。

江戸時代の文献はさほど多くは残っていないが、文政年間に、赫々（姓不詳）、矢田羅文などの活躍が見られ、弘化年間より明治初期にかけて、糸永燕石、荒金呉石などが活躍する。大正末期になると、江藤梅悦主幹で俳誌が発行される。大正から昭和にかけて、油屋虻蜂が俳句を通じて別府観光の宣伝をした。

昭和二十年、戦後になると、高浜虚子より地方の指導者の地位に立つ人として挙げられた小池森閑、岡嶋田比良、渡辺一魯が俳誌を創刊して短文学の振興に尽くす。

昭和四十七年には、倉田紘文が俳誌を創刊し現在に至っている。

## 二 俳壇史上に残る事柄

前記の流れに沿って、残された足跡を辿ってみる。

文政六年（一八二三）矢田羅文が、別府近郊の俳人を中心に俳句集「広葉集」を出版した。文久三年（一八六三）糸永燕石が同好の人の句を集め、句集「青むしろ」を、明治四年（一八七一）に同句集「於てしほ」を出版した。

別府の豪商、荒金呉石は、多くの文人墨客を豪邸に招いて俳句を広め、後に賀寿句集「宇免閑閃集」を出版する。大正十三年、江藤梅悦主幹で俳誌「芳泉の友」が創刊された。昭和十五年、小池森閑主催で九州俳句大会を、高浜虚子を招いて別府鶴見園にて開催した。

戦後昭和二十一年十一月、ホトトギス六百号記念大会が料亭「なるみ」で開催された。この大会には、高浜虚子、年尾、立子を始め、今井つる女、中村若沙、五十嵐播水、田畑比古など約三百人が参加した。昭和二十一年、小池森閑が俳誌「紫苑」を、岡嶋田比良が俳誌「大由布」を創刊して多くの人を指導した。

また同時期、渡辺一魯は、木下大分県知事に呼応して、

大分県短文学の振興につくし、県俳壇に貢献した。昭和

二十六年、橋本對楠の編集で総合句集「湯治舟」が別府より出版された。この句集には、ホトトギス派の俳人五十七人の自選句、八五九句が収められている。昭和二十七年十一月、小池森閑が建設委員長となり、高浜虚子、高浜年尾、星野立子の親子句碑を城島高原に、当時の別府市長、脇鉄一と計り別府市費で建設した。

昭和四十七年、倉田紘文が高野素十（俳誌「芹」主宰）の慫慂により、俳誌「落」を創刊、平成十年現在誌友二千人を超す大結社となっている。

### 三 俳壇史に残る人物

#### (1) 赫々（かくかく）

姓末詳、旧別府町西法寺の住僧で、俳号赫々、別に孤月房とも号した。文政二年（一八一九）二月九日歿。稲妻やふくらかしたる山田かな 赫々

#### (2) 矢田羅文（らもん）

旧速見郡石垣村の人で、職業は医者。八千房の門に学び、文政六年、別府近郊の俳人を中心に句集「広葉

集」を出版した。歿年不詳。

#### (3) 荒金呉石（ごせき）

別府の豪商で通称儀八郎、別号を伍尺、梅守、梅亭、香影などと称した。天明五年（一七八五）大分郡乙津村の里止、池辺家に生まれ、二十余歳で別府の荒金家にツエの婿として迎えられ、荒金家を継承した。

荒金家は累代巨万の富を擁し、豪商として名声高く、常に府内藩の財政に協力し、大給閉山公近訓に眷遇せられた。

また、臼杵藩にも融資の道を講じ貢献したようである。資性恬淡、情操豊かで、俳句を克くし常に吟哦調詠して沢山の俳句を作り、二十八歳の頃には八千房屋烏宗匠から所恩亭伍尺の号を許され、六十三歳の時、立机の典を挙げている。交遊も田能村竹田、毛利空桑、帆足杏雨、僧蘭谷、津田秋臯などと広く、晩年はもっぱら文芸の世界に没頭し、文人墨客を別府の豪邸に招いて多くの実績を残した。

明治二年六月五日、享年八十五歳で不帰の客となる。

引き残る夜汐の光る夜寒かな

呉石

(4) 糸永燕石 (えんせき)

通称亀藏、名は正路、俳号を燕石と称した。旧浜脇村の枡屋、糸永虎藏の弟である。

早くから芭蕉の正風を慕つて俳句の道に精進し、家業を顧みないので親戚一統が疎んじたところ、自らこれを喜び浜脇の一隅に草庵を結び、専ら風流韻事に没頭し、速見郡川崎村の俳友、工藤弥平と交友を結ぶ。存問唱和を頻繁に重ね、帆足杏雨や京都、大阪方面の新直の友と交遊も多かった。

明治七年六月二十九日歿 享年不詳。

蓬萊や今年もおなじおきところ 燕石

(5) 荒金丘鳥 (きゅうう)

荒余呉石の孫娘の婿養子。本名宗十郎。俳句のほか、茶道もよくした。明治三十四年九月十日歿、享年六十九歳。

俳や雲に覚ゆるけふの冷 丘鳥

(6) 油屋虹蜂 (あぶはち)

本名熊八、宇和島生れ。二十七歳の時大阪に出て株式界で活躍。一時巨万の富を得たが失敗し、海外に活躍すべく渡米したが、帰国して再び株式界に入った。

明治四十四年、四十九歳の時別府に来て旅館「亀の井」を経営。バスによる地獄巡りの設立、城島高原の開発、ゴルフ場の開設、県内景勝の案内など俳句を通して宣伝した。

昭和十年三月二十七日歿。享年七十三歳。

あけ春や猪武者のあたり年 虹蜂

(7) 中山紅壁 (こうへき)

本名政男、山口県長府に生れ、十二歳の時中山家の人となる。東大医科卒業、大分病院の内科部長を経て同病院長となる。

大正四年同病院を退いて、別府田ノ湯に、内科中山病院を開業。昭和九年同病院を他に譲り、家に自適して俳句などを楽しんだ。昭和十八年九月十八日歿、享年七十一歳。

朝寒や山手に温泉の高々と 紅壁

(8) 小池森閑 (しんかん)

本名親鑑。明治二十一年八月二十日、竹田市志土知五三二番地生れ。父藤次郎、母カズの長男。慶応義塾大学医学部の時、高浜虚子を紹介されて直接指導を受けるようになる。昭和十七年一月号ホトトギス誌の巻



頭に「天の原ただ明月と太白と 森閑」が選ばれ、昭和二十年十月、ホトトギス同人となる。

昭和二十七年十一月、城島高原に高浜虚子、高浜年尾、星野立子の親子句碑を別府市費で建設し、名山由布岳を讃えた。昭和二十一年五月、俳誌「紫苑」を創刊し、昭和三十八年まで続けた。昭和三十四年、句集「明月」を新樹社より発行した。

昭和三十八年歿、享年七十五歳。

立秋の雲ひきしぼり扇山

森閑

(9) 岡嶋田比良(たひら)

本名坦、明治十七年、杵築市八坂生れ。東京日本医学校を経て、東京順天堂医員となり外科を研修。明治四十三年、帰郷して別府に開業した。

昭和三年頃よりホトトギスに投句、後ホトトギス同人となる。昭和二十一年十一月、俳誌「大由布」を創

人となり、昭和三十年まで続けた。歳時記に「湯治船―春」を新設するなど功績を残す。

昭和四十二年十二月二十七日歿、享年八十三歳。

満潮の歩板けわしき湯治舟

田比良

(10) 渡辺一魯(いちろ)

本名一郎、明治二十五年六月十日、宇佐郡四日市生れ。東京大学医学部卒業、大正十三年から別府市に開業する。大学時代よりホトトギスに投句し、昭和二十四年同人となる。西日本新聞、大分合同新聞俳壇の選者として県下の俳人をまとめ、よく指導した。当時の大分県知事、木下郁と呼応して大分県短文学の振興に尽力した。

昭和二十九年、還暦記念に句集「春月」を虚子選で、

昭和四十年古稀記念に、句集「夏爐集」を出版した。

昭和四十一年九月二十日歿、享年七十五歳。

牡丹の蕾ほぐるる大法話

一魯

(11) 秋吉良聞(りょうぶん)

本名良文、明治二十五年六月五日生。住所―別府市北浜二―四―十一。所属結社―芹、昭和四十九年二月歿、享年八十二歳。句集「合同句集芹の花」。

伊豫訛広島訛湯治舟

良聞

行所より句集「枯桑」を出版。

(12) 田北義道 (よしみち)

本名義道、明治三十九年生れ。住所―別府市中須賀東町三―三。所属結社―水雲、八重桜 (同人会長)、緑野 (同人会長)、落。昭和六十一年、妻満子が遺句集「えにし」を出版。昭和六十年歿、享年七十歳。

夕立上る山一つづつ現はれて

義道

(13) 渡辺自流 (じりゅう)

本名隆治、明治三十三年二月三日、宇佐四日市生れ。渡辺一魯の弟、弁護士。住所―別府市浜町四―十九。所属結社―ホトトギス、芹、雪、落。昭和六十年六月二十七日歿、享年八十五歳。

カッポ酒酔ふて歩けば天高し

自流

(14) 倉田素直 (すなお)

本名直、明治三十五年九月十日生れ。住所―別府市中須賀元町八組。所属結社―海紅、芹、落。

昭和三十年、文化の日功労賞。昭和四十年、大日本蚕糸功労賞、昭和四十五年、黄綬褒章賜。昭和四十九年、迎賓館赤坂離宮特別披露招待。昭和五十二年、叙勲。勲六等单光旭日章等を受賞。昭和五十八年、落発

倉田紘文の父。昭和六十二年歿、享年八十五歳。

天地の枯蓮いつかなくなりし

素直

(15) 藤 小葩 (しょうは)

本名内田美四子。明治三十六年三月一日生れ。住所別府市末広町三―一。所属結社―ホトトギス、かつらぎ、芹、落。昭和六十三年歿、享年八十五歳。

花吹雪ひとりひとり道のゆきし

小葩

(16) 松田禹川 (うせん)

本名保、明治三十四年生れ。住所―別府市北的ヶ浜町二―二十。所属結社―天ノ川、ホトトギス、鹿火屋馬酔木、俳句研究、芹、落。県下第一の書家と言われ、直筆一冊が松田家に残っている。平成三年二月二十三日歿、享年九十歳。

メンヒルや啄木鳥齧してゐたり

禹川

(17) 秋吉方子 (かたこ)

本名良子、明治三十二年十一月三日生れ。住所―別府市北浜二―四―十一、所属結社―芹。合同句集「芹の花」。平成三年三月歿、享年九十二歳。

一人静二人静の芽も静か

方子

(18) 大谷智三(ともぞう)

本名智蔵、明治三十七年生れ。住所―別府市莊園町六一一。所属結社―馬酔木、南風、露。平成四年米寿記念に句集「俳句六百選」を出版。平成八年一月二十一日歿、享年九十二歳。

枯野ゆくおのが枯るるを惧れつつ 智三

(19) 大野茅輪(ちわ)

本名チワ、明治三十四年一月二日生れ。住所―別府市北中四組。所属結社―玉藻、芹、露。

昭和四十一年句集「寒梅」、昭和五十年句集「紅梅」、昭和五十年句集「茶の花」をそれぞれ出版。昭和五十年、大分県芸術祭俳句大会で県知事賞。昭和五十四年同大会で県知事賞。昭和五十七年、大分県福祉二十周年記念大会で、別府老連会長賞。平成三年、豊の国ねんりんピックで県知事賞を受賞した。

平成八年九月十六日歿、享年九十五歳。

末広の山のふもとの茶摘みかな 茅輪

(20) 佐藤峻峰(しゅんぽう)

本名峰雄、明治三十九年四月十五日生れ。

住所―別府市山ノ手十七一、所属結社―駒草、茶殻

火、芹、露。昭和五十七年、句集「万年山」を出版。

句集以外に医学に関する著書「百歳を生きる」など多数あり。大分県芸術祭俳句部門選者、大分県短文学俳句部門選者、大分県俳句連盟会長。

本書大分県俳壇史編纂委員長等を歴任。「み仏に千の灯りの曼珠沙華 峻峰」の句碑が、九重町の竜門寺にある。平成十年五月十五日歿、享年九十二歳。

わが道の何もきびし初明り 峻峰

(21) 青木秀水(しゅうすい)

本名秀、大正十三年台湾生れ。住所―別府市莊園町十二組の一、台北帝大医学部、九大医学部。俳句は露に所属。各病院を経て、別府鶴見病院俳句会を指導、朝見病院俳句会を主催、職員患者を指導した。特に精神病院における俳句療法に努力した。

平成十年八月四日歿、享年七十三歳。

桜草診療室に春来る 秀水

四 別府市で発行された俳誌

(1) 芳泉の友

大正十三年一月、江藤梅悦主幹で浜脇より発行、昭和七年まで（第七十九号）続いた。その第六十八号から別府の投句者を拾ってみると、對楠、林人、芦陽、梅悦、朝暉、雪湖、鯨川、蕾香、傾山、梅城、等の名を見ることが出来る。

(2) 紫苑（しえん）

昭和二十一年五月、小池森閑が主宰で創刊。昭和三十一年まで続いた。主要同人および会員に次の人たちがいた。渡辺一魯、林周平、橋本對楠、佐藤玲人、元重廉直、細川幻華洞、石川時樓、除田竜城、下河原麻三子、佐伯萱邑、深見若水、松田禹川、富安路葭、石川時雨郎、小池千登瀨、安部伸葭、和泉一翠園、三宅まさる。

(3) 大由布

昭和二十一年十一月、岡嶋田比良が主宰で創刊。昭和三十年まで続いた。主要同人及び会員に次の人たちがいた。平田寒月、元重廉直、篠原樹風、橋川忠夫、本田河漢、衛藤直、野崎夢放、下川晴雲、広石東猿、橋川かず子、佐藤無我、林紮苑、井元四極、杉山鈴川、松田わたる、大隅米陽、東原蘆風、中村山思郎。

(4) 落（ふき）

昭和四十七年一月、倉田紘文が主宰で創刊。平成十年九月、通巻三二二号でなお継統中。落は同人制をとっておらず、誌友は二千人ぐらいになっている。日本全国のみならず、ブラジル等海外の誌友も多い。主宰倉田紘文は、NHK俳壇の選者講師を、また各種新聞俳壇の選者を務めている。

句集「慈父慈母」を始め、五冊出版。「高野素十研究」等著書も多数出版、「俳句大辞典」等共著も多く出版している。

五 別府市に存在する句碑

(1) 月かげや四門四宗もただひとつ

松尾芭蕉  
別府浜脇 長寛寺

(2) 自ら早紅葉したる池畔かな

別府血の池地獄 昭和三十八年建立  
高浜虚子

(3) 大夕立来るらし由布のかき曇り

ここに見る由布の雄獄や蕨狩

高浜年尾

これがこの由布といふ山小六月

星野立子

城島高原 昭和二十七年 別府市建立

(4) 海地獄美し春の潮より

別府海地獄 昭和四十四年建立

高野素十

(5) 茶の花もめでたし蝶もめでたしや

高野素十 大野茶園

(6) 一幹の幾春秋の春来る

倉田紘文 大野茶園

(7) 天の原ただ明月と太白と

小池森閑 別府朝見八幡神社

(8) 帆柱につなぎある児や湯治舟

岡嶋田比良 別府北浜公園

(9) 春月や海へますぐの大通り

渡辺一魯 別府市菜天地

(10) 一家毎井一戸水山の幸冷し

田北義道 別府朝見八幡神社

(11) 春の園鎮めの巨石神ながら

東原芦風 大野茶園

(12) 扇山すそに茶づくり五十年

大野茅輪 大野茶園

(13) 大茶園護る月日の茅輪女かな

秋吉方子 大野茶園

(14) 新涼や身を沈めれば湯のあふれ

深田貞子 筋湯温泉

(15) ゆけむりの消ゆる空より風花す

押谷隆 地獄原温泉

(16) 一とゆらぎして万緑へ湯のけむり

西山昌子 海地獄

(17) ゆけむりの中の停車場冬ぬくし

菊池輝行 葉師寺

(18) ゆけむりに桜前線上陸す

佐藤君代 波ノ湯温泉

(19) 風花の舞い添えくれし傘寿の賀

大久保橙青 大野茶園

(20) 古池やかはづ飛び込む水の音

松尾芭蕉 西法寺

(21) 作り木の庭をいさめる時雨かな

松尾芭蕉 海門寺

(22) 交りは淡々として白芙蓉

渡辺一魯 南荘園町

(23) むすふよりはや齒にひくく清水かな

松尾芭蕉 長松寺

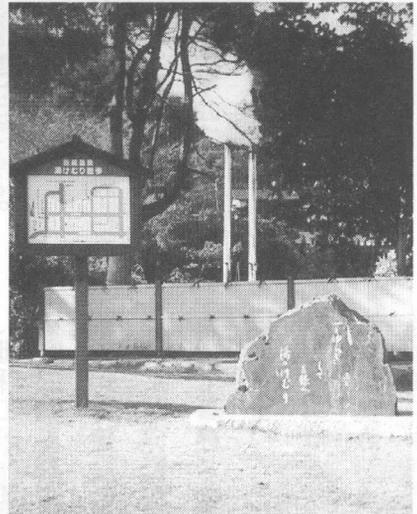


倉田紘文「一幹の幾春秋の春来る」(小倉照湯おおの茶園)

木枯しの止めば湯けむり立ち上がる 幹一



一とゆらぎして万緑へ湯のけむり 昌子



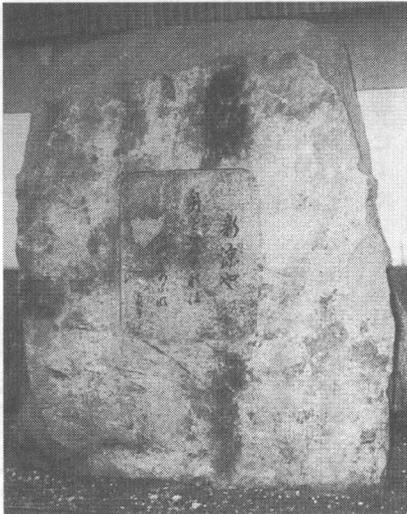
夫に背を流してもらい梅月夜 香代子



湯けむりの中の停車場冬ぬくし 輝行



新涼や身を沈めれば湯のあふれ 貞子



湯けむりに桜前線上陸す 君代



涼新たりふる里の湯のけむり 久平



東海井二戸水山の湯のけむり



湯けむりの消ゆる空より風花す 隆

(写真提供) 史談会前理事 河野忠之氏 (鉄輪温泉「愛耐会」副会長)

### あとがき

平成十二年十二月、大分県俳句連盟より『大分県俳壇史』が発行された。平成五年十月より七年間かかって、大分県の俳句の歴史を江戸時代までさかのぼり、市町村別に編纂したものです。今回別府史談会に入会させていただいたのを機会に、この『大分県俳壇史』の別府市の部より抜粋して投稿することにしました。県俳句連盟の了承も得ております。

私の力不足でまだまだ隠れている資料が有ると思われるが、これくらいが精一杯でした。

昭和二十一年の「ホトトギス」六〇〇号記念大会の様子や、城島高原にある高浜虚子・高浜年尾・星野立子の親子句碑建設の経緯の詳細など、わかれば面白いと思いましたが、資料不足でした。その他のことでも、俳句についてご存じの方がございましたら教えて頂ければ、と思います。

(社団法人「俳人協会」会員)